



「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3/TEL 045-774-9861洋光台  
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / ●世話人代表 金子 敬  
●事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 巻頭言

**中田 義直**

東京地方バプテスト教会連合・会長

なかだよしなお

### どこに立っているのか

昨年9月、日本バプテスト連盟と日本バプテスト女性連合の共催したルワンダ・ミッション・スタディ・ツアーに参加しました。

ルワンダで最初に迎えた朝はとても気持ちの良さやかな朝、赤い土の丘が朝日に輝く、本当に美しい朝でした。そして、ここでジェノサイドという未曾有の悲劇が起きた、ということがどうしても心の中で重なり合いませんでした。佐々木さんに案内していただいたキガリの街は活気に満ちていて、その様子もジェノサイドという現実と重なり合いません。それは、ジェノサイドという悲劇は特別な場所で起きたのではない、ということをも示しているようでした。

帰国後ある方から、「私もルワンダのことを書いた本を読みました。日本と比べて、いろいろと問題のある民族のようですね」と、あたかもジェノサイドが民族性によって起きたといわんばかりの差別的な言葉に憤りを覚えました。そして、そのような視点で物事を見ている文化人と呼ばれる人の存在を知らされ、心が重くなりました。このことを通して、ルワ

ンダで起きた悲劇は、特別な国で起きた特別な出来事として、私たちの生活から切り離して考え、切り離して考えたいと願う私たちの現実を思い知らされました。

ルワンダの街の一等地には、国会議事堂よりも立派では、と思わせるような大国の大使館があります。ルワンダの周辺諸国にはレアメタルなど貴重な鉱物資源が眠っています。この資源を得るためにルワンダに拠点を置く国々があるそうです。ジェノサイドという悲劇によって傷ついたルワンダを支援し、その一方でルワンダを踏み台に利益を得ようという思惑が見え隠れする現実があるのです。

私たちのツアーが訪れた、キブンゴという町のニャカラビ・ペンテコステ教会で行われた REACH による「癒しと和解のセミナー」で昼食に配られたのは、素朴なパンとアメリカのグローバル企業の清涼飲料でした。素朴なパンと世界中どこでも見ることのできるボトルを並べて見ながら、自分の立っている場所を考えさせられました。私はこのボトルの側に立っているのではないか、ルワンダの人々から利益を得ようとする側の社会で生きて

いるのではないかと。

私はこのツアーに参加したことを通して、佐々木さんから知らされるルワンダ

の現実と歴史は、自分の日々の生活から切り離すことはできない、と教えられました。（市川大野キリスト教会牧師）

## 佐々木和之 ささきかずゆき

### 新しい働きに向けて

この国の次代を担う若者たちに、希望の光がしっかりと受け継がれるように、力を尽くしていきたいと思えます。

#### ■ノヘリ・ンズイーザ！

クリスマスおめでとうございます！この通信が皆さまのお手元に届くころには、日本ではクリスマス商戦が始まっていることでしょう。ルワンダは人口の約9割がキリスト教徒の国ですが、クリスマスが近づいても、日本やアメリカのように街灯にツリーが立ったり、クリスマスソングが鳴り響いたりすることはなく、いたって静かです。私がお世話になっている教会では、クリスマスの礼拝の後には恒例の晩餐会があります。教会のメンバーが持ち寄った料理をただ一緒に食べるだけ、というとってもシンプルな会です。でも、礼拝に参加したかどうかに関わらず誰でも食事にあずかれるので、街にたむろしている若者たちや近所の子どもたちまでが集まってきて、その晩餐会はいつも大にぎわいになります。この完全にオープンな晩餐会、教会の人たちの「クリスマスの喜びを分かち合いたい！」という気持ちがよく表れていて、いいなあーといつも感じます。

#### ■「償いのプロジェクト」第2期続報

前号では、今年4月に「償いのプロジェクト」第2期がスタートしたことをお伝えしました。今回はその続報をお伝えします。プロジェクトの第1期は、政府から労働奉仕刑を科された虐殺加害者による被害者家族のための家造りでした。

第2期は、刑期を終えて故郷の村に戻ってからも「償いの取り組みを続けたい」という、元受刑者によるボランティアの家造りを支援します。

これまでに家造りが完了したのは、新築で1軒、改築で4軒の計5軒です。さらに、11月20日現在、3つの集落で計25名の元受刑者たちによる3軒の家造りが進行中です。こちらも年内中には完成する見込みです。

つい先日、プロジェクトに参加している元受刑者の方々、そして、家を建ててもらった虐殺の生存被害者の方々に集ってもらい、一緒にお話しする機会がありました。その集会で、テオネストさんという、虐殺の生存被害者の男性が、皆の前でこのように話し始めました。「私は元受刑者の人たちが、家を改築してあげましょう、と言いに来たとき、彼らのことを信じられませんでした。でも今は、崩れかかっていた我が家をもう一度頑丈な家にしてくれたことに、感謝の気持ちで一杯です」。そしてその後、こう宣言したのでした。「他の困っている人のために家造りがあるときには、今度は私もボランティアとして参加します！」

その言葉を聞いて、私はとても嬉しくなりました。それは、テオネストさんの心の中に大きな変化が起きたことを感じたからでした。彼の家の改築工事が始まった当初は、テオネストさんが元受刑者た

ちの作業に加わることはありませんでした。しかし、しばらくすると、彼も一緒に働くようになりました。両者の関係性が、「あなたたち=建てる人、私=建ててもらえる人」でしかなかったのが、しだいに「共に建てる私たち」に変わっていったのでした。改築工事が終わった今は、他者のために「建てる人」になりたいと言い、それを、元受刑者たちと一緒にしようとしているのです。

償いのプロジェクトはその名が示すとおり、加害者による被害者のためのプロジェクトです。しかし、「加害者」と「被害者」という立場を固定化するためのものであってはなりません。私は、キレへの人々が「加害者」と「被害者」という関係に乗越えられる日が来ることを願ひながらいつも働いています。しかし、その関係再構築のプロセスの初めには、加害と被害の現実を直視し、できる限りの償いを進めていかなければならないのです。なぜなら、そのことを通して、被害者と加害者それぞれの尊厳が回復され、共に同じ尊厳ある人間として歩みだす可能性がひらかれるからです。今回のテオネストさんの宣言は、プロジェクトを通してそのような関係の再構築が確かに始まっているとの手ごたえを感じさせてくれたのでした。



改築が終わった家を前に。ジョンさん家族と3人の元受刑者

### ■続く和解への歩み

前号で、加害者による償いとしての家造りを願っているサベリアナさんという

被害者女性と、彼女のための家造りを仲間に呼びかけて始めたタデヨさんという加害者男性のことを紹介しました。もう2ヶ月以上前のことになりますが、家造りの現場でこの2人の双方から別々に話しを聞きました。サベリアナさんは、大虐殺の時に彼女の両親の家を襲撃し、彼女自身にも暴行を加えたタデヨさんたちが取り組んでいる家造りを評価しながらも、まだ誰も直接彼女に謝罪していないことについての不満を吐露しました。

「彼らが罪の意識を持ち、償いとして家造りをしてくれていることはよく分かる。でも、直接謝罪の言葉が欲しい」、と私に言ったのでした。

サベリアナさんと話した後、タデヨさんに謝罪の有無について尋ねました。すると彼は、ガチャチャ裁判の中で謝罪はしたものの、刑期を終えてからサベリアナさんを訪ねて直接謝罪していないことを認めたくて、「家が完成し、彼女が入居する日にきちんと謝罪したいと思っている。言葉だけでは軽すぎるから」と言ったのでした。

謝罪を心待ちにしているサベリアナさんの気持ち、そして、謝罪に向けて一歩踏み出しきれずにいるタデヨさんの気持ちの両方が私にはよく分かりました。そして私はタデヨさんに、サベリアナさんがどれだけ謝罪の言葉を必要としているのかを伝え、「皆で力を合わせ、なるべく早く家を完成させよう。そして、あなたたちが彼女に謝罪するとき、私も一緒にいるから」、と彼を励ましたのでした。

それから約1ヵ月半後、家の屋根と壁ができあがったところに現場を訪ねた時のことです。タデヨさんが私のところにやってきて、少しはにかみながら「心の準備ができた、だから今日彼女に謝罪したい」と告げたのでした。タデヨさんは手に謝罪文を持っていました。突然の展開に少し驚いた私は、現場に同行してくれた同僚のフィデルさんと一緒に、まずサ

ベリアナさんの意見を聞いてみました。そして、彼女の意見を尊重し、家の完成祝いの時に謝罪をしてもらおうということになったのでした。

サベリアナさんの希望により、完成祝いには近隣の人々にも集まってもらうことになりました。彼女は私に、加害者の人たちの謝罪を自分だけが聞くのではなく、近隣の人たちにも聞いて欲しい、と言いました。それは、自分が受けた苦しみをきちんと公の場で承認して欲しいという、彼女の心からの願いなのでしょう。それだけではなく、彼女は、加害者たちからの謝罪の後に、自分の気持ちを彼らに、そして、近隣の人たちに伝えたい、とも言いました。彼女はその時、どんな言葉をその場に集う人たちに語りかけるのでしょうか。私には、きっと彼女が過去のことだけでなく、これからのこと、未来のことを語るのではないかと、との予感がします。でも、ハラハラドキドキしながら、その日が来るのを待ちわびています。前号でもお願いしたように、主イエス・キリストが、彼・彼女らの間にいてくださるよう、これからも続けてお祈りください。



T大学の皆さんとサベリアナさんの家の前で



家造りに参加したイギリスの高校生

## ■新しい働きに向けて

私はこれまで現地のキリスト者によって設立されたNGO、リーチ（Reconciliation Evangelism And Christian Healing）で大虐殺後を生きる人々の癒しと和解のために働いてきました。2011年11月1月からは、これまでのリーチの働きに加え、ルワンダにあるキリスト教プロテスタント諸教派の連合大学、Protestant Institute of Arts and Social Sciences (PIASS) において、農村開発専攻の学生を指導しつつ、ルワンダ初の平和学関連学科となる「平和文化・紛争解決学科」の創設に協力することになりました。今から2年前、将来の働きについて祈り求める中で、「次代のルワンダを担う人材の育成」というヴィジョンが与えられたのですが、神様がその扉を開いてくださったのです。



PIASSのキャンパス

過去5年間にリーチの仲間たちと進めてきた大虐殺の被害者の癒しと生活再建、加害者の更正・社会復帰、両者の関係修復に向けての活動は、全てとても大切な働きです。これらの働きの中で、大虐殺後の和解と共生という、困難な課題に向き合う人々が主イエスと共に灯している希望の光は、ルワンダの人々にとっても、私たちを含め、世界の人々にとっても大きな希望です。その希望が、この国の次代を担う若者たちにしっかりと受け継がれるように、力を尽くしていきたいと思えます。

前号でも触れましたが、ルワンダは16年前の大虐殺以降、ポール・カガメ大統

領の強力なリーダーシップのもと「奇跡の復興」を成し遂げた国として知られるようになりました。確かに首都キガリをはじめ、都市部の発展には目を見張るものがあります。しかし、一握りのエリート層と大多数の貧しい庶民の間の経済格差は広がる一方です。しかも、この国の暴力紛争の大きな要因であるフツとツチというエスニック集団間の不平等の問題も、以前と今では力関係は逆転しているものの、根本的には何も解決していません。

またルワンダは、以前のようにエスニシティによる差別を廃止し、国民和解の面でも大きく前進している国として注目されてきました。しかし、この和解の歩みも決して楽観視できるものではありません。1994年7月、ルワンダ内戦の終結後、反政府武装勢力から政権与党に転じたルワンダ愛国戦線（RPF）には、民間人の殺戮を含む深刻な人権侵害に関与した疑いが持たれています。今年10月に公表された国連の調査レポートも、コンゴ民主共和国（当事はザイール）に逃げ込んでいたフツの難民に対して行われた数々の虐殺に、RPF政権下のルワンダ国軍が関与したと報告しています。しかし、現RPF政権は、過去の問題は軍事裁判で決着済みであるか、告発自体が虚偽であるとして、それらの真相究明と関与者の処罰を頑なに拒否してきました。その結果、RPFによる戦争犯罪はこれまでにほぼ不問に付され、国内でそのことに言及することはタブーとされてきたのです。RPFの残虐行為を旧政権によるジェノサイドと同列に論じることはできませんが、ツチ主体の現政権側の加害責任が問われないまま、旧政権側にくみしたフツの犯罪のみが裁かれるという一面的な正義の取り組みは、両集団間の将来に深刻な禍根を残しかねず、包括的な真の和解をもたらすものにはなり得ないでしょう。

8月の大統領選挙は、懸念されていた衝突もなく「平和裏」に実施され、現職

のカガメ大統領が93パーセントの得票率で地滑り的な勝利を収めました。しかし、7年前同様、今回の選挙も野党関係者の一斉検挙や現政権に批判的な新聞の発行停止などの厳しい言論統制が敷かれ、野党は大統領候補を擁立することすらできませんでした。それどころか、選挙が終わってからも、2つの野党の党首が逮捕され、今も拘留されています。ジェノサイドを容認する言動をした、あるいは、コンゴで活動する反ルワンダ武装組織の活動に関与したなどの嫌疑による逮捕ですが、裁判の場で明確な証拠が提示されるには至っていません。現政権を批判する人々への弾圧は、激しさを増すばかりなのです。

現大統領の残りの任期は7年ですが（憲法により3選は禁止）、カガメ氏の強権的な統治が終焉を迎える時に、ルワンダが再び混乱に陥ることを懸念する識者も少なくありません。そのような政治的危機に乗じて、エスニック集団間の対立を煽る政治勢力が台頭することも十分に考えられるのです。その時、暴力による政権交代という誘惑をしりぞけ、非暴力的な手段に徹して変革に取り組む勇氣ある人たちが必要です。その人たちは、キリストの十字架によって敵意を滅ぼされた「新しい人（たち）」（新約聖書エフェソの信徒への手紙2章15節）、キリストによって委ねられた「和解のために奉仕する任務」（新約聖書コリントの信徒への手紙二5章18節）に生きる人たちでなくてはならないでしょう。

内戦と虐殺という痛ましい過去を乗り越え、新しい時代を手をたずさえて築いていこうする若者たちを育てること。彼・彼女らが、真の平和と和解の実現に向けて、共に歩みだすのを励まし支えること。これらの大切な働きのために労していく道がひらかれたことをとても嬉しく思います。まずはルワンダ初の平和学関連の学科を創設するというプロジェクトに取り組むことになりますが、将来的には、

平和と和解について学ぶ学生たちが共に寝起きをし、聖書を学び、祈り、また、菜園で汗を流すことのできる学生寮をつくりたい、という夢も描き始めています。

日々のお祈りによって励まし支えていてくださる皆さま、これまでのご支援を感謝いたします。来年からルワンダ活動支援が第3期目（1期3年）に入りますので、ご支援の継続をよろしくお願い申し上げます。（11月23日記）



青年を対象としたリーチのセミナーで

## 自立・巣立ち・祈り

# 佐々木 恵

ささきめぐみ

ルワンダで学んだ「希望の力」を受けて子どもたちもたくましく育っています。

この9月より、長女の萌が、日本で大学生活をはじめました。萌にとっては初めての一人暮らしです。1才3ヶ月で日本を離れて以来、長期で日本に滞在するのは初めてのことで、いろいろと親の心配はつきないのですが、それでも、2年間親元を離れてケニアで寄宿舎生活を送ったことは、子どもにとっては親離れ、親にとっては子離れの、大きな第一歩になっていたのだと思います。「萌、いろいろ失敗することがあると思うけど、心配ではないの？」と、一人暮らしを始めるに当たって聞いてみると、「失敗しても、どうにかなると思っているから大丈夫!」との答えでした。それを聞いて、当たり前なのですが、自分が生んで育てた子とは言え、すっかり自分とは違う個性を持った一個の存在になったのを感じたのでした。

長男の仁も、この1月より、萌の通ったケニアのRift Valley Academyに行くことになりました。アフリカ大陸各地で活

動する宣教師の子どもたちが学んでいる学校です。すでに萌から学校の情報をいろいろと聞き出しているようですし、ルワンダから転校していった友だちも複数いますので、1月から始まる新生活をとっても楽しみにしているようです。家族への対応は本当に素っ気ない仁ですが、外づらはとてもよくて、友だち関係もいつも恵まれています。新しい環境でも、その友だち関係に支えられて、馴染んでいけることでしょう。母親としては、未だに基本的な生活習慣が確立されていないことは、巣立ちに当たって心配ではあるのですが……。



仁と共に  
喜ぶ、キガリの  
学校の友人たちと

13才の共喜は、まだしばらくは私たちの元で暮らすこととなります。ティーンネージャーになったとたんに、精神的にもぐんと成長し、一番下のかわいらしさはだんだん薄れ、本人はすっかり「一人前」のようにふるまっています。彼の巣立ちの日はまだ先のことですが、今その準備段階といったところでしょう。ということで、1月からは、共喜と私たち夫婦の3人、そして、犬のクッキーにクレオ、猫のビスとナナ、金魚の金ちゃんとの生活になります。



クッキー（黒）とクレオ（白）

さて、長女の萌の一人暮らしは今3ヶ月が過ぎようとしています。その間、多くの方々に支えられながら、元気に過ごしています。月に一度は、横浜のおじいちゃん・おばあちゃんの所に顔を出し、しっかりお小遣いももらっているようです。ルワンダと日本、それぞれの日常生活の様子が全く見えない地理的状况の中で、娘の事は心配でしたらきりがありません。しかし、彼女の「失敗してもどうにかなる!」という言葉が表すように、失敗しても、それで終わりではありません。私は、ルワンダに来て、ルワンダの人たちから「希望」ということを教えていただいているのですが、ジェノサイドの真っ暗闇と思える状況の中でも、先が見えないと思えるような経験の中でも、イエス様の愛を信じて、そこからしっかりと立ち上がり、希望を捨てずに歩き始めた人たちとの出会いを通して教えてもらったことでした。娘が失敗したり、災難にあったり、落ち込んだりすることはあるかもしれませんが、「失敗してもどうに

かなる!」という言葉が、ただの楽天家の言葉ではなく、しっかりとした希望に基づく言葉であるときに、失敗や災難や落ち込みから再び立ち上がって歩んでいけると思います。ルワンダで出会った人たちが、そのことをしっかりと証してくれているのです。子どもたちの巣立ちは私にとって大きな心配を伴う出来事ですが、全てのことを益にしてくださる神様に信頼しつつ、ルワンダの地から娘の、そして息子の巣立ちを見守りたいと思います。

最後に、ご報告を一つ。丁度1ヶ月前に、家を引っ越しました。前の家の家主さんが大掛かりな改築をして家賃を上げたいということで、ルワンダに帰国早々家探しをしたのですが、前の家と同じ家賃の感じのいい家を見つけることができました。家が落ち着くまでしばらく慌ただしくしていましたが、今、やっと我が家らしくなった気がしています。この家に萌が帰ってくるのはいつでしょう？彼女がまだ知らない家が「我が家」になったことに少々違和感も感じながらも嬉しく生活しています。ゲストルームもありますので、ルワンダにお越しの際にはどうぞお泊まりください。（11月23日記）



夏休みを過ごしたスカイ島で



私たちの新居

## ●感謝とご挨拶●

「佐々木さんを支援する会」のみなさま。いつも、佐々木さんの働きをおぼえ、祈り、ご支援くださり、ありがとうございます。

「支援する会」は3年を一期として運営されていますが、現在は第二期の3年目に当たります。支援の輪の広がりいただきながら、こうして6年目を過ごすことができていることに心から感謝いたします。

去る8月22日に、帰国中の佐々木和之さんも同席して行われた世話人会では、第三期目の方向性を模索するにあたって、これまでREACHを通して行われた和解と癒しの働きとしての「家造り」プロジェクトの経験と、佐々木さんが学んで取得した平和学博士号を生かし、ルワンダの人びと、とくに若者たちに平和構築のプロセスを教えるプロジェクトに、徐々にではあっても、軸足を移すことを語り合いました。そして、この度佐々木さんとプロテスタント大学との間に契約が交わされて、「平和と和解の働きを担う人材の養成」という重要な努めを果たしていく道が拓かれたことをお知らせいたします。

「支援する会」としてはできる限り佐々木さんに求められている使命に寄り添いつつ、また、そこで起こされている、修復的正義のプロセスが、単にルワンダのことではなく、正に今日、日常的に露わになる日本社会での痛み（差別やいじめなどの関係破綻）に向き合うことにも重なることを覚えつつ、現地との交流を含めてさまざまな情報発信を担っていきたく願っています。

また、「支援する会」として、若者たちをルワンダに派遣する「スタディー・ツアー」の可能性も大いに検討していきたいと考えているところです。

第三期も、ぜひ継続してご支援くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

「佐々木さんを支援する会」世話人会代表 金子 敬

## 新たに支援をくださった方々です。感謝致します。

(’10年7月1日～)

東京地方連合南ブロック女性会、今村早紀子、中川正子、横浜峰二子

以上（敬称略・献金年月日順）

## ●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。
- なお、「郵便自動引き落とし」をご利用いただけます。ご連絡いただければ、所定の申込用紙を送らせていただきます。洋光台教会・蛭川まで。（電話045-774-9861）
- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ）

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。

佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 金子 敬（古賀教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、村上千代（日本バプテスト女性連合幹事）、吉高 叶（栗ヶ沢教会牧師）